

ゲンは怒っている

『はだしのゲン』の作者である漫画家中沢啓治氏に、2007年8月にお話を伺った。中沢氏は、1945年8月6日、小学校1年生のときに被爆した。1968年にはじめて原爆をテーマにした『黒い雨にうたれて』を発表し、以後数々の原爆や戦争をテーマにした作品を世に問うてきた。その代表作が同氏自身の分身とでもいべき『はだしのゲン』である。この『はだしのゲン』をはじめとする氏の作品からは、原爆投下や侵略戦争をおこなった責任者（原爆投下をしたアメリカと原爆投下まで招く無謀な戦争をおこなった昭和天皇以下の日本の戦争指導者）に対する責任追及をまったく行ってこなかった戦後日本政治に対する激しい怒りと厳しい批判がひしひしと伝わってくる。

<思想形成における父親の強い影響>

私の思想形成に関しては父親の影響が強い。まだ小学校1年生の私をつかまえて、「この戦争は間違っている」とか、「絶対に日本は負けて、おまえが何歳になったら、日本はどういう状況になる。白い米やそばを腹一杯食べる時代がきっと来る。」とか、そういうことを繰り返し言っていた。だから、イナゴやサツマイモの蔓を食べるしかなかった時代に、そんな良い時代が来るのかなんて考えられなかった。だけど父親は、「日本は必ず負ける。負けて良い時代が来るんだ」と。食事の前に私たち子供は全員正座させられて、父親の話を、もう耳にたこができるほどに聞かされた。しかし、「白い米が腹一杯食べられるようになる」などということは信じられなかった。だけど、親父はそこまで予見していたのかな、って思う。確かに日本は負けて、今は飽食の時代だ。

親父は京都に出て、左翼系の劇団仲間と話し合いをしていたのではないかと。若い頃に京都に出て円山応挙派の日本画と蒔絵を勉強した。絶えず京都に出入りしていたし、滝沢修の新協劇団系に属し、演劇をやっていた。広島の新天地にあった医師会館で演劇活動をやっていて、島崎藤村の「夜明け前」とか、ゴーリキーの「どん底」とかを選んでやっていた。左翼系だから、当然官憲にチェックされていて、聞くところによると、劇団の事務所の真向かいで特高がずっと「誰が入ったか」というようなことを全部チェックしたらしい。ある日、一網打尽で捕まった。

僕はあの日、非常に怖い思いをした。幼心にあれほど恐ろしい思いというのはなかった。あれは僕が5歳頃のことだった。母が髪を振り乱し、わなわたと震えて、僕は我が家に重大なことが起きたという思いで母を見ていた。親父が連れて行かれるわけ。あの時の恐怖感というものは、未だに忘れられない。昭和19年のことだった。

親父は連れて行かれて、帰ってこない。お袋に「どうして親父は帰ってこないんだ」と問い詰めると、お袋は僕らに嘘をついていた。兵隊検査に行っている、とね。それにしても長い。1年近く帰ってこないんだから。後で劇団の人に聞いてみたら、拘留所につき込まれて、相当しごかれたらしい。歯がぼろぼろになって帰ってきた。劇団の人に聞いてみると、人は塩気のあるものを与えると活動的になる。塩気のない食事を与えられると、気持ちが萎えてしまうのだそうだ。そういう食生活をしていたし、拷問も食らって、しょんぼりして帰ってきた。帰ってきてても相変わらず前に言ったような、「この戦争は間違っている」と聞かされた。頑固一徹な親父だった。拷問されても転向することはなかった。親父の弟

が身元保証人になって連れて帰ったのだが、帰ったのは19年の終わり頃。

お袋と新居を構えたのは舟入本町で、そこでずっと暮らしてきた。

<母親寸描>

お袋はハイカラで、同級生だった枝田というお婆さんがいて、その人によると、袴をはいて、自転車に乗って、映画は行く、喫茶店は行く、という感じで、「お母さんは若い頃は恵まれていたわよ」ということだった。ところが絵描きのところに嫁に来てから、子でくさんで、僕が絵を描くと怒っていた。絵描きにはさせまいと思っていたんだらう。絵描きの親父に懲りたんじゃないか。旧姓は三宅といって、子供の自転車を作っていた。そんな裕福なお袋と絵描きの親父が結婚したというのは、何か取り持つ縁があったんだらう。フィーリングが合ったんじゃないか。

<中沢家の家族構成>

僕は、長男、長女、次男の後だから三男。その下に弟がいて、原爆の日に生まれた幼い妹という構成。原爆投下の日、お袋は産み月で大きなおなかをしていた。親父は、子供達に接する態度は一貫していた。長男が学校の生成がもの凄くよくできて、先生が来て、「この子は是非進学させてやってくれ」と言った。親父は怒って、「職人に学問はいらん」と啖呵を切ったらしい。お袋が取りなして、「そこまで言ってもらえるなら、行かしてやろう」と、四高に入った。長男は学徒動員で呉の海軍工廠に行つて溶接の仕事をしていた。戦艦大和のところだった。長男が自慢していたのは、大和の砲塔の中に自分の身体がすっぽり入る、自分が入った、ということだった。長男は今も健在で、吉島にいる。

次男は当時国民学校3年生だった。あの当時は3年生から集団疎開だった。田舎に行ったら腹一杯食べられるんじゃないかと、うらやましかつた。ところが手紙が来て、腹が減ってたまらないから大豆を送ってほしい、と泣き言ばかりいつてきた。そこで親父が、「連れ帰るか」と行っていた。原爆寸前のことだ。連れて帰ってきていたら、原爆で一緒に死んでいた。僕は、田舎に行っても飯は腹一杯食べられないんだな、とつくづく思った。

<父親たちの死>

「はだしのゲン」の中身と違うのは、僕自身は、父親の死んだ場面には立ち会っていないということ。お袋が微に入り細に穿って話をしてくれた。そのことが頭に入っているから、漫画では、そこにゲンをに入れて助け出そうとした、ということにした。お袋がいつも夢でうなされる。弟の泣き叫ぶ声が耳にこびりついて、やりきれないと言っていた。「お母ちゃんも一緒に死ぬ」と言って弟を抱きしめ、どんなに引っぱっても身体が抜けない。そうこうしているうちに、弟が今度は「熱いよ」と言い出し、親父も「なんとかせえ」と言う。長女の英子は柱に挟まれたのか一切声がしなかった。もうあの時は、自分は気が狂っていた、とお袋が話した。「お母ちゃんも一緒に死ぬんだ」と泣き叫ぶお袋を、運良く通りかかった町内の人が「もう諦めなさい。あんたまで一緒になって死ぬことはないだらう」といって一緒に連れて逃げてくれた。ふり返ると、もの凄い炎で、「お母ちゃん、熱いよー」と叫ぶ弟の声がもろに聞こえたそう。やりきれなかった。そういう辛酸をつくした事柄をお袋は僕に話したということ。残酷な殺し方だ。

その後、お袋に、我が家に行つて骨を掘り出せと言われて、長男と一緒にバケツとスコップを持って行つて、母親の言うとおりのところを掘っていった。お袋の話したとおりのところに弟の頭蓋骨があった。子供の頭蓋骨というのは本当にきれいなものだ。しかし、

炎天下の中でその頭蓋骨を持った時は、本当にぞーっと寒気がした。頭が動かずに、じりじりと焼かれていったのかと思うと身の毛がよだつわけだ。次いで4畳半の部屋から親父の、奥の6畳の部屋からは長女の骨が出てきた。女の子の頭蓋骨というのは表情がある。やはり優しい顔をしている。「ああ、骸骨にも表情があるんだ」。お袋は、「英子は幸せだった。一気に即死で、あれは良い死に方だったからよかった」と言っていた。

骨を掘りに行った時の我が家のまわりは死臭でいっぱいだった。それは、完全に焼け切っていないから。まだ肉体が残って、ごろごろしていた。一番驚いたのは、どの防火用水の中にも人間が飛び込んで入って死んでいたのだが、最後の最後の瞬間まで、人間らしい感情が表れた死に方をしているということだった。我が子がかわいいんだろう。ぎゅーっと抱きしめている。死体が水ぶくれになってふくれあがっているから、子供の顔が母親の肉体の中にめり込んでいる。土橋の繁華街の近くに来ると、水槽に死体がいっぱいだった。あそこは遊郭があったから、みんなまだ寝ていたんだろう。だから、火に巻かれて水槽に大勢が飛び込んだのだろう。長男と二人で市内を通過して帰ろうということで、広島7つの河が全部死体で埋められていた。僕も漫画の中で描いているように、腹がふくれあがっている。ガスが発生して、腹がそのガスでプスー、プスーと破れる。そこに水が流れこんで、死体が沈んでいった。

一番恐怖感を感じたのは、あんなにウジが湧いてハエになるということ。もの凄いハエだった。もう目も開けられないほど真っ黒になる。そして、わーっと襲ってくる。原爆があつたにもかかわらず、ハエは生きてくるんだ。不思議だが、ウジ虫は本当に早い。あつという間にウジ虫だらけになった。すさまじい、やはり。人間の身体に、あんなにウジ虫が湧くものか、と。上空で動くものは何か、といったら、ハエの群舞。広島で動くものといったら、死体を焼く煙とハエが群舞していることだけ。

僕は本川小学校に転校したのだが、夏は相生橋の上から飛び込む。ガキの仲間の中では、頭から飛び込まないと格好が悪い。足から飛び込むと、「こいつは駄目な奴じゃ」といわれる。だから無理してでも、頭から飛び込む。欄干から飛び込むと、本川の川底をずーっと潜っていくわけ。そこは白骨の河。今でも掘ったら、白骨がもの凄く出るはず。あそこらは清掃していないから、今でも砂に埋まって人骨がいっぱいあるはずだ。

原爆もひどかったが、その後の食糧難にも苦しめられた。江波というところに一時身を置いた。戦後は本当に飢えて厳しかった。江波の河口の方には、潮が引くとあばら骨だけの死体がずらっと並んでいる。あばら骨の下のところをずっと掬っていくと、アサリがいっぱい出てくる。あれは人間を食っているのだ。人間を食ってアサリが成長している。そのアサリを一所懸命拾ってきて、飢えをしのいだ。海に恵まれていたというか、河が7本あって、本当に飢えをしのぐ上で助かった。

よそ者ということでもずいぶんいじめられたものだ。地元のガキたちに取り囲まれて、「よそ者、よそ者」と。僕はやけどをしていて、そこを殴られると、びゅーっと血膿が出る。するとガキたちはげらげら笑うわけ。1対1だったら絶対に負けない自信があるが、集団でいじめに来るから、辛抱するしかなかった。よそ者を排撃するというか、人間の正体を見た気がする。助け合い、というのは嘘。よってたかつていじめに来るわけだから。だから、日本人の正体を見た気がする。

お袋は取りもしない傘をとった、と無理矢理派出所に連れて行かれ、始末書を書かせら

れた。お袋は、「6 畳一間ですから、どこでも調べて下さい」と言うのだが、「いやあ、こいつは町から来た泥棒猫だから、突き出す」と、始末書を書かせられた母親の姿が忘れられない。僕が大人だったら、あそこに乗り込んで行ってぶん殴ってやろうとしていただろうが、子供心に中の様子を見ていると、泣きながら「二度ととりません」とサインしているお袋がかわいそうだった。奴らは本当に嫌がらせでやったのだ。この江波の町にいたら僕らは殺される、逃げ出さないと駄目だということになって、陸軍兵舎の材木を拾ってきてはためて、今の本川町、当時は鷹匠町とっていたが、そこにバラックを建てて戦後の出発をした。

広島はミシン針とか、マッチ針とか、針が名産だ。その針を握って仕分ける技術があるらしい。お袋は、娘時代にそれをやって、再開された製針会社から仕事を得て、戦後の収入源になった。長男が熔接の技術を学徒動員のときに覚えたから、町工場で働いていくらかの収入を得ていたようだ。長男が「自分は大学に行きたかったんだ」と言って、「親父が死んだからいけなくなった」と愚痴った。本当にやりきれない思いをした。お袋が「仕方ないじゃないか、今さら」と怒っていたけどね。

結局、お袋と長兄に育ててもらったということになる。僕は小学校 1 年の時から飯炊きをやっていた。やらなくてはいけない、という義務的なものがあった。今みたいにガスで飯を炊くということではない。ふいごで吹いて、薪を焚いてから、ご飯を炊く。わずかな米にサツマイモを切って、そういうことをしなくてはいけないという義務的なものが身についていた。お袋が働きに行く。だから次男と二人で交代で飯炊きをやっていた。

国民学校に入ったのは昭和 20 年。僕は国民学校に入った最後の人間。小学校時代はずっと鷹匠町にいた。本川小学校を卒業。原爆で焼け残った唯一の学校だから、市内のあらゆるところから生徒が通ってきた。その生徒を狙って ABCC が来た。ABCC が格好の資料として子供達を連れて行った。学校に車で乗り付け、子供達に検便を持たせて連れて行くわけ。親の了承もたらず、非常に強引だった。ABCC は 1948 年にできてから、すぐそういうことをはじめた。本川小学校は、市内全域から通ってくるわけだから、ABCC にとっては最適の対象だった。疎開していた健康体の子と被爆した子とを対比させながら両方を連れて行っていた。子供心に ABCC は怪しいと分かった。あそこに行ったら何かおいしいものを食べられるのか、と思って、いった子に聞くと何もくれないとのこと。僕の妹が友子といったのだけれども、7 年間かけて専従班が市内にしぼってずっとさがしていた。7 年目に探し当ててきたが、「4 カ月で死んだ」と言ったらがっかりしていた。その人は、「7 年間その子を探してきた」と言った。ABCC にしてみれば、8 月 6 日に生まれた子だから必要だったんだろう。ABCC というのは実験屋だ。原爆投下というのは、何百万人の人を救ったというが、あれは戦争にかこつけて原爆実験だ。二つのタイプの原爆を作って、戦争にかこつけて実験したかったということだ。アメリカの詭弁だ。ABCC は何もしてくるわけでもなかった。

僕の書いたものの中では、権力とか支配者とかに対してもの凄いい怒りを表しているが、僕は天皇制のことについて何も言わない奴は信用しない。やっぱり天皇制だ。あの天皇制の恐ろしさというか、その天皇制が今日でもなお存在しているということ、日本人は自覚しなければいけないのではないのか。またそれを煽って、引っ張り出してくるのではないかと恐怖感を感じる。1947 年に天皇が広島に来た時のことはよく覚えている。自伝で書い

たことだが、学校側が生徒たちに半紙を1枚ずつ渡した。何をするかという、15センチのコンパスで丸を書いて、クレヨンで赤く塗れと言う。竹を拾ってきて日の丸の旗を作るというわけ。「何をするのですか」と聞いたら、「明日天皇陛下が来るから、相生橋の土手に並べ」と言う。僕は親父から天皇制のことを聞かされていたから、「この野郎が僕の親父や一族をむちゃくちゃにしやがったな」と思うとね。僕は一番前に並んでいた。黒塗りのフォードが来て、天皇が白いマフラーをして、寒風の中を来た。身体がああ寒さの中で火のように熱くなった。「あの野郎が俺たちをこのようにした、親父を殺したんだ」と思うと、飛びついていきたくかった。あの衝動は未だに忘れられない。教師は「バンザイせえ、バンザイせえ」という。「何を言うか」と下駄で瓦の破片を蹴った。それがタイヤに当たって、ぼんとはね返った。腹が立った。あれほど全身が火のように燃えたことはなかった。だからよく覚えている。寒くてね。その中を天皇がのうのと来る。本当に「こいつ、絞め殺してやるか」という気持ちになった。

(天皇を迎えた広島には、天皇に対する怒りとか憎しみとかいうものがまったくないが、その原因はなんだと思いますか、との浅井の質問に対し)それはやはり戦前の教育のせいだ。戦前の教育は、本当に日本人を変えてしまった。教育の恐ろしさということをつくづく感じる。「こいつがポツダム宣言をのんでくれていたら、原爆投下というようなことはなかった」という怒りはあるわけ。自分たちはのうのと生き残って、紅顔破廉恥な野郎だと思うと。僕のように天皇に対して激しい怒りを感じていた人もいたとは思いますが、そういう人たちはみんな獄中死しているのではないか。僕は親父からいわれた。天皇制は恐ろしいものだ、と。どうして日本人はこれほど天皇にぺこぺこしなければいけないのか、と聞くと、親父は、それは日本を統一するためだ、と答えた。現人神にして拝ませていく。そういうシステム。僕は小さい時からそういうことを聞いていたから、並ばされて「万歳せえ」と言われたときは、本当に腹がたった。怒りがこみ上げてきた。自分のそのような気持ちが広島で表面に出てこないのは、広島が保守的であるためだろう。広島県には実に保守的であるという県民性がある。これはどうしようもない。変えるということは大変なことだろう。

(原爆市長・浜井信三が平和都市建設法を作り、広島の復興に取り組む過程を見ると、被爆者を大事にした復興ではなくて、いかにも先に復興ありき、という感じがするとの浅井の問いかけに対して)それはやはり被爆者の切り捨てだろう。そして浜井市長の時代は、ほとんどの人が被爆者ということで、補償というようなことは考えられなかったということもあるのではないか。(原爆投下で激減した広島は戦後急速に回復していったこと、その中で被爆者の人口は7~8万人で変わらないことなどから考えると、急速な人口回復を可能にしたものは引揚者とか他県からの流入者とかの非被爆者の人口増加と考えられるわけで、戦後の「空白の10年」といわれる期間における復興を担ったのは非被爆者であり、被爆者を片隅に追いやった上での復興ではなかったのかという気持ちがするが、そのような理解は間違っているだろうかという浅井の問いかけに対して)それは間違っていない。そこに差別が生まれるわけだ。差別が生まれることによって、被爆を口にしてはいけないというようなことになった。おおっぴらに被爆したということを言えないようにしてしまった。だからその差別が恐ろしい。そういうことに対して抗議の声を上げるということではできない。僕は鷹匠町に住んでいて、近くの娘さんが首をつって死んだとか、そうい

う話をよく聞いた。やはり差別だ。怖い。失望してのそうした事件がいっぱいあった。(大田洋子の『夕風の街と人と』は1953年当時の基町一带に住む被爆者群像を描いているが、被爆者を追いやった形での広島復興だったし、8月6日の式典にしてもはじめから被爆者が主人公ではない形でおこなわれたという感じを受けるが、中沢氏は当時からの現場におられた身としてどういう感じだったのか、という浅井の質問に対し)差別があって、おおびらに被爆を強調すると、よってたかって「被爆者面をするな」というような変な運動の方法がとられたのではないだろうか。大田洋子は、第5福竜丸で被爆者が出て大きな問題になったときに、「ざまあ見ろ」と言った。そんなことが今頃分かったか、ということだ。それほどやっぱり被爆者は疎外されていたのだ。言いたくても言えないし、言えば差別が生まれるということだった。差別があるということは、文句を言わせないということ。私の知り合いは、東京の女の人と結婚話があって、結婚式を東京でやった。そうしたら誰も来ない。被爆者だといったら、危険だという認識がある。あれは、権力者にとっては思うつぼだ。あの差別ということでものをいわせないということは都合が良い。被爆者が自己主張しないように押さえつけるのだ。被爆者がはじめて前に出て来たのは、1955年の原水禁世界大会だった。やはり、核実験がどんどん行われて、死の灰が降ったりして、そういうことで危機感を感じたのではないだろうか。

原水爆禁止世界大会が分裂したのは1963年だが、あれもおかしな話で、ロシアの原爆はきれいで、ほかの原爆は悪いというようなばかげたことを主張した者がいる。ああいう議論にはついて行けない。右も左もあるものか。やっぱり核廃絶という目的は同じではないか。(被爆者は、当初原水禁運動に大きな希望を持ち、1956年には被団協もできることにもなったが、その原水禁運動が分裂したことに対して大きな失望と幻滅と批判を感じて、運動自体にもそっぽを向いてしまう、ということもあったのだろうか、との浅井の質問に対し)それはその通り。だって、ついて行けないから。僕なんかも、「何やってるんだ、こいつら」という気持ちだった。核廃絶ということで力を合わせれば、力が倍になるわけだ。

1961年に上京して、66年にお袋が亡くなるまでは、僕は広島に帰るまいと思った。広島に帰ると、惨めなことばかり味わうわけだ。だから東京で骨を埋めようという感覚だった。お袋が死んだときに、あのお袋がいなかったら、僕はいつかのやくざになっているか、広島市内でのたれ死にしているかだっただろう。お袋がいるから何とかやってこられたんだと思った。大事なお袋だと思っていた。そのお袋が死んだということはすごいショックで、それで広島に帰ってきた。お袋に感謝しながら火葬場に送っていったが、僕は、人間が焼かれてどういう状態が出てくるかということについては想像がつく。親父や弟の骨も掘り出しているから。お袋についても、頭蓋骨、胸骨がこういう形で出てくるだろうな、と。ところが、釜から出てきて、台座を見たら骨がない。どっちが頭かも分からない。そんな馬鹿なことがあるかと一所懸命にかき回した。白い破片が点々としているだけ。放射能という奴は骨の髄まで奪っていくのかと、もの凄い怒りが湧いた。大事な大事なお袋の骨まで取っていきやがったかと。

僕は原爆に対しては一切目をつぶっていたんだけど、東京の被爆者に対する差別というのはすごい。仲間内で何気なく広島で原爆を受けたんだと言うと、異常な顔をする。あんな冷たい目を見たことがない。これはおかしい、と思ったのだが、被団協の人にそのことを話したら、「広島で原爆を受けた」と言ったら、その人の湯飲み茶碗を東京の人は持

とうとしない、放射能が移るから、と。もうそばに寄ろうとしない、そういう無知な人が多い。そういわれてはじめて合点が行った。「ああ、そういうことなのか」、と。そして二度と原爆のことは言うまい、と、思っていた。それで東京の6年間は黙っていたが、お袋が死んで骨も残っていなかったことで本当に腹が立って、放射能はお袋も僕もずいぶん浴びたから、骨の髄まで取っていきやがったか、と。大事なお袋の骨を返せという怒りが一気に湧いてきた。僕には漫画しかないから、やってやろう、と思った。そこで怒りの中で書いたのが『黒い雨にうたれて』だった。アメリカへの怨念をたたきつけるように書いた。あの内容はすさまじいが、あれが本音だ。怒り一本で書いたのだが、なかなか発表できなかった。僕は高校生ぐらいに読ませたいと思った。高校生ぐらいが読んでくれたら理解できるのではないか、と。そこで大手の高校生向けの雑誌のところへ持っていった。すると、中身はいいんだけど過激すぎる、といわれて、1年間いろいろなところに持ち回った。諦めかけたが、大手でなくても誰かに読んでもらえればそれで良いじゃないかと思い直し、「漫画パンチ」というエロ本の出版社に持っていった。その編集長がえらく理解がある人で、「非常に感動した」、と。しかし、「これを出したら、中沢さんと自分はCIAに捕まる」と。青年誌だから、トラックやタクシーの運転手といったお兄ちゃん連中が読んでいた。

出版社には、「珍しい」といった反響が寄せられた。そこで「黒い」シリーズを書け、ということになった。(被爆という点に着目した読者の感想は来たのか、という浅井の質問に)「そんな事実があったのか」という疑問が寄せられた。つまり、原爆のことをまったく知らないということだ。あれは僕が見たことばかりを書いているのであって、嘘ではない。しかし日本は、「唯一の被爆国」と盛んに言ってるが、全然理解されていない。これには、書いた僕の方がショックだった。手紙をもらったが本当に愕然とした。「はだしのゲン」のときも圧倒的にそうで、「あれは本当のことですか」「もっともっと真実を教えてください」という内容のものが圧倒的に多い。戦争と原爆がこんなに悲惨なものだとは僕らは思いませんでした、という。(「はだしのゲン」が小学校や中学校の図書館に置いてあるが、子供達がしっかり読んだらもっと広島についての理解ができるはずだと思うのだが、その点について著者としてはどのような実感があるか、という浅井の質問に)やはり、「はだしのゲン」によって戦争と原爆のことを意識したというのが圧倒的だ。そういう意味では、自負するのではないが、俺は先駆者だと思っている。児童文学などでは書かれているけれども、あそこまで迫っているものはない。漫画という手法は最高だと思う。「はだしのゲン」によって戦争と原爆が認識されたという意味では、作者冥利に尽きる。(あれだけ反戦・反天皇制の内容の作品を、文科省はどうして小中学校に置いておくのを認めるのか、という浅井の質問に)あれは僕も不思議に思っている。漫画が図書館に置かれたのは、「はだしのゲン」が最初だった。先鞭をつけた。「ゲン」によって、今中堅の人たちにまで浸透している。僕としては、僕のペン1本で書いたものがあそこまで浸透してくれたかと思うと嬉しい。(最近もテレビでドラマ化されたが、テレビで映像化するに当たっての限界を感じたのだが、との浅井の指摘に対し)確かに限界はある。天皇制という肝心なところは外しているな、と。あれはやはりしょうがない。僕は天皇制が絶対に許せないと思っている。日本人はまだ天皇制を自らの手で裁いていない。腹が立つ。今からでも遅くはない。ああいう問題を裁かなくては。(どういう裁き方があるか、との浅井の質問に)やはり人民裁判だ。日本国

民が本当に東京大空襲から始まって天皇のために日本列島がどれほど大変なことになったか、根源である天皇制をもっともっと問い詰めなければいけないのではないかと。僕は、憲法改正についていえば、天皇の条項だけは変えてもいいという立場。あとは変えさせない。憲法9条なんてとんでもない。絶対に変えさせない。

(原爆について書き続けていると、娯楽ものを書きたくなることがあるということが『はだしのゲン自伝』にあるが、それはどういう心境なのか、との浅井の質問に) 被爆のシーンを書いていると、死体のおいが浮かんでくる。においが鼻の奥まで浮かんでくるし、目玉がえぐられてふくれあがったすさまじい死体が迫ってきて、本当にやりきれないものだ。あの時の現状に引き込まれていくから。暗い気持ちになる。もう二度と書きたくない、と思う。そういうときに娯楽ものを書く。気分の転換をはかるわけ。

(被爆二世を主人公にした「ある日突然に」「なにかが起ころ」で主人公が白血病になるわけだが、そういうことは実際に起こっているのか、との浅井の質問に対し) あり得る。

(放影研などは、今のところ被爆二世に対する影響は認められない、という立場と聞いているが、浅井の指摘に対し) やはり影響するのではないかと。心配なのだ。自分の子どもが生まれてくるときに、被爆しているから、と心配だった。放射能の影響で変な子が生まれたらどうしよう、という不安感があったが、幸い五体満足に生まれてくれた。やはり被爆二世の検診は受けるようにしている。被爆二世に対する検診システムがあるから、検診だけは無料だ。やはり子供を作るときは不安だった。結婚するときも不安だった。幸い身内に被爆者がいたこともあって、妻の方は理解があった。結婚するときには反対が出るだろうと不安だった。幸い理解があって、とんとん拍子で結婚できた。子供のときは、内心心配だった。今孫が二人。

(漢字の広島と片仮名のヒロシマについて、どのように思われるか、との浅井の質問に) 国際的ということで片仮名のヒロシマというのだろうかけれども、僕としては漢字の広島に固執したい。片仮名のヒロシマには違和感がある。僕は原爆を落としたアメリカにも責任はあると思うが、国民を戦争に駆り立てていった天皇制、教育の恐ろしさということで、漢字にこだわる。片仮名の方ではそういう意味あいとんでしまうのではないかと。

(栗原貞子について) 僕は彼女と一緒にNHKのテレビに出たことがある。8年ぐらい前か。NHKスペシャルで。二人の対談。本川小学校でロケ。被爆の体験を語り合った。栗原さんが「中沢さん、よう広島に帰って来んさったのう」と広島弁でね。そこから話を始めようということだった。(栗原貞子はすごく良心的な広島思想家だと思っているが、との浅井の指摘に対し) 僕も好きだ。辛辣なことをびし、びしと書く。僕に似てるな、と思う。天皇制に対してもばしと書いている。やはり意気投合した。しかし広島では孤立してしまった。あれは、痛いことを言われるとやはり組織が左右する。みんなが一致団結すれば力になるのに。ちょっと辛辣なことを言うと、違うとか、色をつけてしまう。ああいうことはいけない。平和運動というものはみんなが一丸となっていかなければ。だから僕は政党には絶対に入らない。日本人というのはすぐ色をつけたがるという嫌なところがある。すぐ色をつけて「あいつは何系だ、何系だ」といって、それで切ってしまう。本当に度量がない。僕は、仕事が来れば「いいですよ」と応じる。政党には一切こだわらない。

(どうして広島に帰る気持ちになったのか、との浅井の質問に) 10年前までは絶対に寄



りつかなかった。広島町を見ると、すごく思い出すのだ。過去のことを。河を見ていると、白骨の河が思い浮かぶ。人の肉を食って大きくなったエビの穴場とかね。そういう思い出がよみがえって、町を歩くとああだった、こうだった、ということがよみがえるのだ。死体の臭気を思い出すとやりきれない。広島には寄りつきたくないという感覚があった。あの臭気というのは言葉では表現できない。思い出したくないことがよみがえってくるから。僕のような感覚はほかの被爆者も同じだと思う。恩師がいるし、その誕生祝いに同級生が集まる。やはり広島はいいな、と。友達がいるから。時代が押し流してくれたのだろう。そういう生々しいものを。そのうち広島で骨を埋めるつもりだ。瀬戸内海が好きだから散骨する。墓は要らない。

(広島がアウシュビッツになれないのはなぜか、との浅井の質問に対し) 戦争に対する執念が日本人には欠けているのではないか。アウシュビッツのめがねの山みたいのところと髪の毛が山みたいになっているところを見ると、やはりすごい執念だな、と思う。広島だけでなく、日本人にはああいう執念がない。日本人には中断していくだけのパワーがほしい。歴史を消し去るということは忘れるということ。あくまで中断するというだけの執念がほしい。そのことを日本人には期待したい。次の世代に期待している。上の世代にはもう諦めている。「はだしのゲン」を読んで、あれはどういうことかな、と考えてくれる次の世代を期待する。その点については楽観的に考えている。想像力を働かしてもらって、是非嗣いでほしいし、バトンタッチしたい。そういう点では、今の日本の教育の方向は恐ろしい。教育を改革しようという方向を自民党、与党は絶対に手放さないのではないか。しかし、憲法第9条は絶対に守る。血と涙で購って手に入れたのだから。アメリカから押し付けられたものというが、あの時点で国民は納得したのだから、こんなすばらしいものはないという。それを忘れて、押し付けだから変えたらどうかなどというのは大間違いだ。血と涙でどれだけうめいてあの平和憲法を手に入れたか。これは絶対に外してはいけない。僕の第9条への思いは中学校のときから。これがあるからこそ、日本は平和に暮らせる。憲法発布のとき、僕は小学生だったけれども、日本はこれから兵器も持たず、軍隊も持たず、平和に暮らしていく国に生まれ変わりました、と言われたとき、すばらしい憲法だな、と思った。親父のことも思い出した。本当に親の教育というものは大事なものだ。親が教育しなくてはいけない。学校の先生に頼るのではなく、学校の先生がどのように教えたらいいですかと聞く。何を言っているか。僕は、8月6日に広島に原爆が投下されました、ということだけでいいではないかと言う。いかにふくらませて、子供に伝えるか。それが教師の役目だと言っている。いくらでも教材はあるのに、それは教師の怠慢だ、と。

(日本の将来には希望を持つということだが、広島についてはどうか、との浅井の質問に) 広島の保守的なところは変えなくてはならない。保守的な体質というか、広島仁というのは実に保守的だと思う。もっと革新的な人が増えてくれなくてはいけない。変わるためには、各個人がこつこつとやっていくほかはない。僕は漫画家だから漫画を武器にして戦う以外にない。各ポジションにいる人が各ポジションで訴えていくほかはないのではないか。イメージーションを増やすことをどんどんやっていったらいいのではないだろうか。その可能性を信じなければやっていけない。否定的な気持ちは非常に強いけれども、可能性を生み出す気持ちを持たなければ駄目だろう。自分を鼓舞するのだ。そして、広島もアウシュビッツのように人間の尊厳をもっともっと謳いあげていかなければならない。